

高齢者大学文芸部 6月詠草

菊池市を言祝ぐごとし楠若葉の間にのぞく日の丸
ひかる 川口 敦子
九十六歳呆けてはならぬ小学生の曾孫らの訪ね来
る朝 安永ウメ子
道の辺の穂つばな見るに友達とホテル追いにし遠
き日の頭つ 中津 ツユ
梨の実の一つひとつの愛おしく摘果するとき少し
戸惑ふ 河津 豊子
賜りし鈴蘭の花咲きたるによるこび告ぐる友は逝
きたり 荒木 幸
病室の人ら互みにやさしかり残りの時間語ること
なく 北村ツギ子
カサブランカの匂ひきつしと言へる妹逝きて五年
目白き花咲く 中原 光子
黄昏に友と語らふ散歩道うす紅の合歡の花美し
小池ミエ子
大智禪師の生誕の地に佇めり不知火の里小高き丘
に 今坂 文子
高齢化、未婚、晩婚、少子化と未来の不安広がり
てゆく 宮本 幸子

万句の里俳句会 6月句会

子燕の巣立ち賑はふ雨の朝 緒方 玲
山梔子の香とも夜風の匂ひくる 松永 久子
友の母遺影と成られ夏座敷 高木 陽子
川釣りの後姿の夏帽子 鋤本 トミ
しなやかに艶やかに濡れ今年竹 田中ひさ子
柳川の風柳川の花菖蒲 東 鈴子
庭師来て庭も心も五月晴 稲田 羚子
手の届かざるは残して梅漬くる 北村あつ子
岨畑の見渡すかぎり栗の花 梅田 昭子
ゆつくりと咲いて雨待つ額の花 光本とよいち
万緑の中より生るる水の音 田中 美智
のぼり来て夏鶯にいたはられ 吉井 綾子

肥後狂句桜会 6月例会

むぞうなげミイラになったムツゴロウ 高倉 新米
嘘ばかり飲み放題は買だった 太田 雄三
むぞうなげ蛇に吞まれてゆく蛙 狩野 本六
若さ若さ又爺さんのつくじらす 荒木 玄海
嘘ばかり又乗せられた口車 藤田 藤紫

泗水短歌会 6月詠草

初咲きのピンクの薔薇の一輪は誰も寄せつけぬ棘
を向ける 大島 ひと
ゆりの木を見上げて親娘宝物探すがごとく花を数
うる 長尾はるみ
現し身は一寸先は闇夜とぞ病知らずの夫が運ばる
平嶋きくえ
新葉かく吹き合ひけむか山城に防人が妻に託す碑
の短歌 古田のぶ子
笑つても泣いても幼の可愛さよ手から手へと渡し
たしかむ 増田久美子
目覚むれば母が居そうな春の午後竹の風鈴からか
らと揺る 吉安 永子

せせらぎ俳句会 6月例会

ジョッキ持つ手に夕焼の始まりぬ 藤本 邦治
花柳散る音もなく句碑の辺に 坂本まつえ
今年またおはぐろとんぼ来て安堵 村山 数恵
夕餉時違へず守宮網戸越し 吉岡 民子
動くたびに干梅匂ふ家の中 服部 静子
さみだれ萩咲けば久女を語り合ふ 内村 泊虹
太陽の箱詰といふさくらんぼ 五丁 義昭
河鹿鳴き山の静けさ深めけり 藤本アツ子
一望の早苗田続く窓去れず 内村 鈴子
母子草も雑草なれば抜くことに 寺本 和子
冷たい泳いで楽しいプール開き

七城短歌会 6月詠草

体に毒 媽が塩気ば濃うする 水 光
強かなあアゴで婿どんあつかわす 三代
体に毒 煙草が飯より好射とらす 千 笑
顔はお言うな三日もすつと馴れてくる 美 由
女はもうけ 美容整形玉の輿 梅 月
女はもうけ 三食昼寝で暮らさるる 五 女
女はもうけ 年より若う化けられる 江 彩

旭志文芸俳句会 6月詠草

柿の木の蔭に入れば先客がありて蛙が鳴き始めた
り 岩下ミツエ
キャベツ畑の青虫潰す身をめぐる蝶にはまこと我
は敵なり 高木 精
虫干しに遠き日の我が振り袖の下に暫く座りてい
たり 水田紗陽子
起き抜けに窓を開くれば待ちていし如く流れいる
若葉風かも 松岡ミチエ
森林浴たちどまりては深呼吸 芹川のり子
浅蜷汁夕飼ひと時和みをり 中尾ヨシコ
夕焼やふり向かで明日に夢をかけ 出田みどり
漕ぎ終へし棧橋の生徒等日焼顔 中山 栄子
時鳥聞く投函の道すがら 水谷 ミネ
蛭より夜店の金魚にぎあえる 岩根サチ子
新緑の並木に心洗われる 工藤 房子
盆提灯家紋を入れて夫祀る 東 芳子
老鶯の一句も添えて礼状書く 芹川 蓉子
大木に子すずめ鳴きて空青し 岩根 良子

肥後狂句水笑会 6月例会

顔はお言うなつけ替え出来るもんでなあ 三水
あつかましき媽ば譲れて言うてきた 好 茶